



# 営農情報

## 「あまおう」1月の管理

第55号 平成29年1月10日

南筑後普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

### 1 生育状況

1番果房は、早期作型で収穫終盤、普通作型で1～3果目の収穫が中心です。また、早進株は少なく、2番果房は12月10日～15日には、早期作型と普通作型ともに出蕾が中心で、昨年、一昨年と比較すると果房のステージは遅い傾向です（図1）。

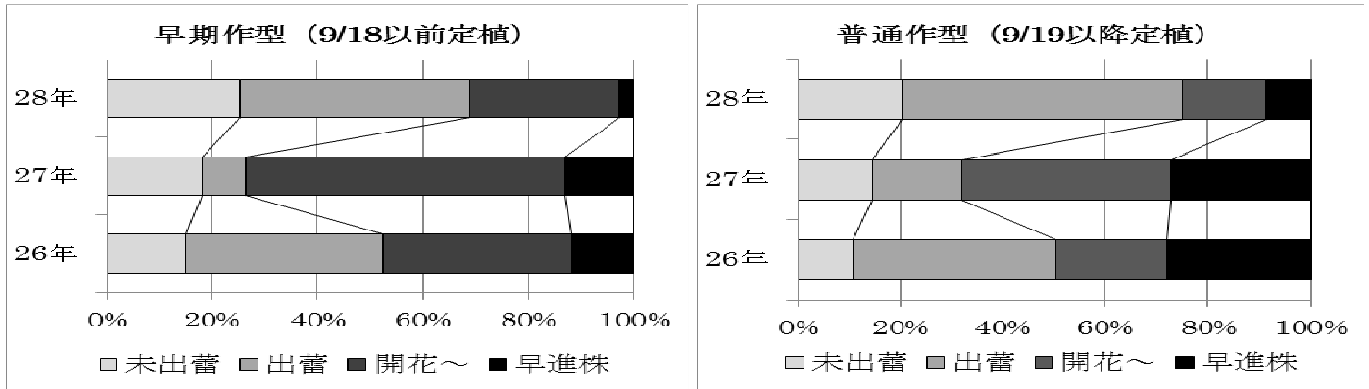


図1 年度別2番果房出蕾状況（南筑後普及指導センター管内 12/10～12/15 調査）

### 2 気象予報と今後の見通し

#### (1) 気象予報

福岡管区气象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

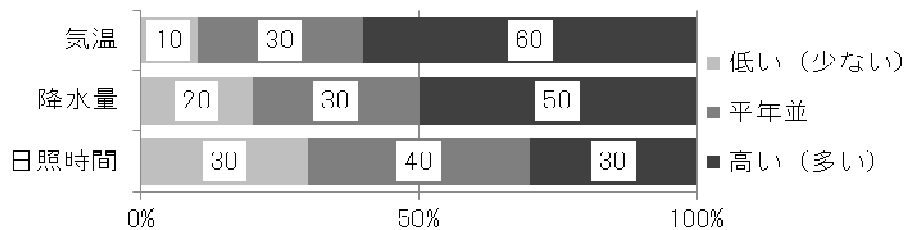


図2 1か月予報（九州北部地方 予報期間：12月24日～1月23日 発表日12月22日）

#### (2) 今後の見通し

ハダニ類やうどんこ病の発生が見られます。今後、気温が高く推移すると見込まれることから、更に発生が拡大すると考えられます。春先にかけて増殖させないように防除を行いましょ。

気温が高く降水量が多い予報となっていることから、灰色かび病や果実の黒かびの発生が予想されます。換気や暖房機の活用でハウス内の過湿を防止しましょ。

### 3 今後の管理

#### (1) 温度管理

- ・ 2番果房の収穫開始までは、昼温（特に午前中）を高め管理し、心葉の展開や果房生育を促進する。収穫開始後は、昼間の温度をやや下げる。
- ・ 電照時間を延ばしても心葉の伸びが悪い場合や、展葉速度が遅くなった場合は温度を上げる。（設定温度を上げる、午前中は遅めに換気する、夕方早めに閉めこむ等）

表1 温度管理の目安

生育ステージ	昼間	夜間	備考
1 番果房収穫終了後	24～28℃	5～7℃	2 番果房の生育促進と、3 番果の早期出蕾を目的として高めの管理
2 番果房出蕾～肥大期			
2 番果房収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの温度管理

※ 寒波が予想される場合はあらかじめ高めの温度設定にしておく

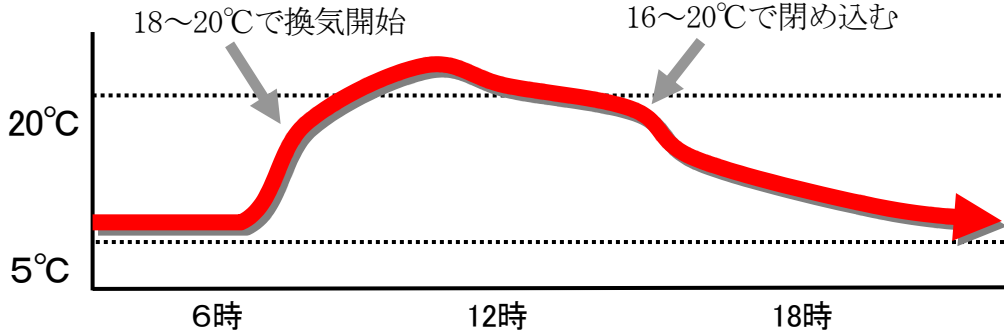
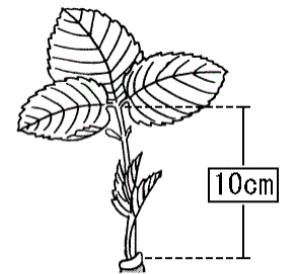


図3 一日の温度管理模式図

(2) 電照管理

- 電照の効果は1週間～10日後に現れるため、わい化してから電照時間を延長しても手遅れとなる。心葉の展開位置が、外葉より低くなり始めたら、電照時間を延長する。
- 電照時間は、2時間～6時間の範囲で調節する。
- 夜温が高いと、電照効果は高くなる。
- 厳寒期は立ち上がりすぎているようでも、電照を完全に切らないようにする。



心葉展開時の葉柄長10cm

表2 電照時間の調整の目安となる葉柄の長さ

電照時間	時間を延ばす	現状維持	時間を短くする
心葉の葉柄長	9cm以下	9～11cm	11cm以上

<4番花芽分化時期>

【早期作型】 12月下旬～1月上旬

【普通作型】 1月中旬

※12月下旬～1月中旬は4番果房の花芽分化時期にあたるので極端な電照延長を避ける。

(3) かん水

- ・ 地温を下げないように、晴天日の午前中にかん水する。
- ・ 暖房機の稼働時間が長いと乾燥しやすくなる。そのため、高めの温度で管理する場合、葉からの蒸散量が増えるためかん水量を増やし、こまめなかん水を心がける。
- ・ かん水の目安は、pF値1.7～1.8とする（朝の葉つゆ状況を適湿状況の目安とする）。

(4) 施肥

- ・ 液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。
- ・ 液肥は、株が弱らないよう定期的に施用する。しかし、株が旺盛な場合は、春先に急激に立ち上げる原因になるため、液肥の施用を減らす。

(5) 草勢維持

- ・ 2番果房出蕾期や、草勢が弱く株のわい化が予想される場合は、ジベレリンの散布を行う。
- ・ 成り疲れを軽減するために、発根促進剤（チャンス液、パフォームソイルなど）を定期的に施用する。

（裏面へつづく）

(6) 株整理

- ・ 収穫が終了した果梗枝は早めに除去する。果梗枝が残っていると、3番果房の出蕾抑制及び果実キズの発生、果梗枝折れの原因にもなる。
- ・ 無駄な養分を使わないように、ランナーやどろ芽は除去する。
- ・ 枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。
- ・ 葉陰などで果実に光が当たらないと、黄種果が多くなるため玉出しを行う。
- ・ 株整理は、収穫量の少ないうちに行っておく。

(7) 摘果

- ・ 2番果房の摘果は、草勢や果梗の形に応じて摘果を行う。

通常果梗：3～5果/枝  
かんざし果梗：6～8果/枝

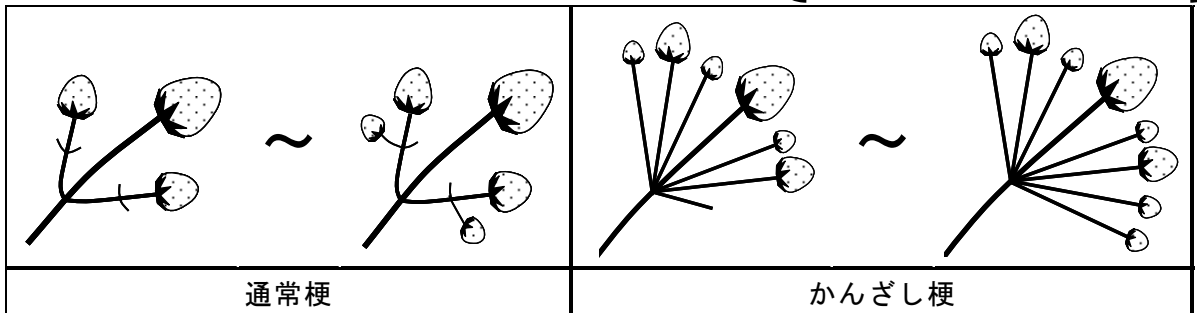


表3 通常梗とかんざし梗の摘果のしかた

(8) 早進株の対処方法

- ・ 摘果を強め(10～12果/1+2果房)に行うことで着果負担を軽減し、株の弱りを防止する。
- ・ 摘果は小果を中心に行うが、頂果でも果形が悪い場合は、積極的に摘果を行う。

(9) 病虫害防除

○灰色かび病・菌核病

- ・ 今後、本格的に寒くなるにつれ、ハウスを閉めこむことが多くなり、湿度が高くなりやすいため、灰色かび病・菌核病が発生しやすくなる。
- ・ 湿度が高いと発生しやすいため、できるだけ換気を行う。
- ・ 曇雨天日などは、暖房機の送風や循環扇を活用し、結露を抑える。
- ・ 最低夜温が高く暖房機が稼働しないことが予想される日には、設定温度を上げて暖房機を稼働させる。
- ・ 発病した葉や果実は、速やかにハウス外に持ち出す。
- ・ 定期的な薬剤散布により予防に努める。
- ・ 降雨前日のかん水はなるべく控える。

○うどんこ病

- ・ 湿度80～100%で発生しやすいが、乾燥条件でも発生する。
- ・ 軟弱徒長した株に発生しやすいので、多発したほ場では昼間をやや低めの温度管理を行う。
- ・ 発病した葉や果実は、速やかにハウス外に持ち出す。

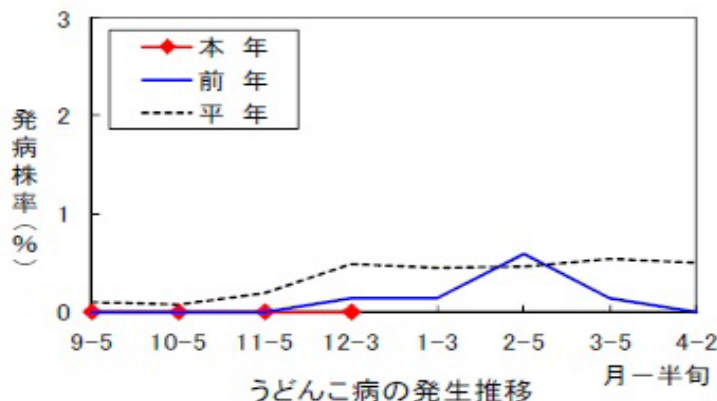


図4 平成28年度 福岡県におけるうどんこ病発生状況 (12月19日発表、福岡県病虫害防除所調査)

## ○ハダニ類

- ハウス内の出入口や谷など、毎年発生しやすい場所を注意して観察する。
- 活動の衰える厳寒期に防除を徹底し、2月以降の急増を抑える。(株整理の後が防除に最適)
- 寄生した葉の除去はすみやかに行き、ほ場内や周辺に放置しない。
- チリカブリダニ(天敵)の放飼は、1月中旬～2月上旬に行う。
- チリカブリダニ(天敵)を放飼する前に、天敵に影響のない農薬を散布し、必ずハダニ類を徹底防除してからチリカブリダニ(天敵)を導入する。

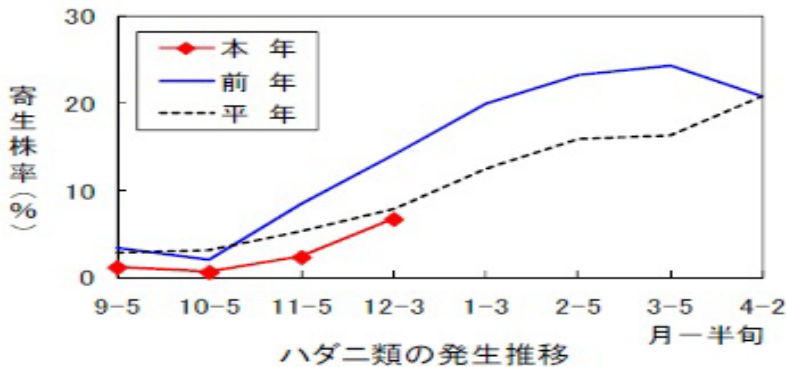


図5 平成28年度福岡県内におけるハダニ類発生状況 (12月19日発表、福岡県病害虫防除所調査)

## 特集「ミツバチとクロマルハナバチの併用で不受精果発生を防止」

厳寒期の低温や曇雨天日が続く時期には、ミツバチの訪花活動が低下し、不受精果が発生することがあります。そこで、ミツバチの活動が低下しやすい曇天日や低温条件下(ミツバチの活動可能温度下限15℃以下)でも活動できる“クロマルハナバチ”(図6)をミツバチと併用することで不受精果の発生を抑えることができますので、この技術を紹介します。



図6 クロマルハナバチ

### ＜ クロマルハナバチの導入方法 ＞

- (1) 導入頭数は10aで30頭程度、20aで50頭程度。
- (2) 2番果房開花時には導入する。
- (3) 一箱の利用可能期間(巣箱の寿命)は1か月半～2か月程度。
- (4) 多湿を嫌うため、巣箱はハウス内のコンテナ上など地面と離して設置する(図7)。
- (5) 導入後は、花粉と糖蜜の給餌を行う。
- (6) 注文してから届くまで3～4日程度要するので、期間に余裕をもって利用計画を立てる。

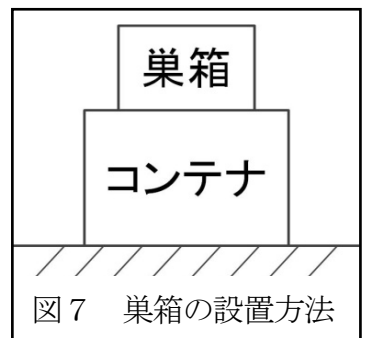


図7 巣箱の設置方法

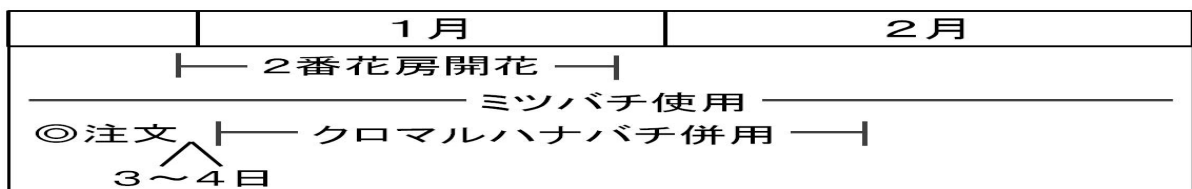


図8 クロマルハナバチ併用模式図

### ＜ クロマルハナバチの導入時の注意点 ＞

- (1) 農薬によってミツバチと影響日数が異なります。農薬を使用する際にはクロマルハナバチへの影響日数を確認しましょう。

花が少ない場合など、過剰に訪花し、めしべや花弁に褐色のキズが生じることがあります。過剰訪花を防止するには、クロマルハナバチの訪花時間を制限する(2日に一度放飼、複数ハウスでのローテーション利用)や、巣箱に花粉を給餌するなどの方法があります。

**「慣れ」と「油断」が事故を招きます  
“安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう!**